

可被成候 已上

四〔天保二年〕四月二十六日

尚々 追々向暑ニ赴キ可申候 折角御自愛可被成候
 二月中旬が当月中旬迄霖雨ニてふりつき 一円風
 邪流行いたし候処 四五日已来久くにて 日々日
 の光をおかミ申候 御地はいかゝ候哉 大かた同様
 ト被存候

一筆致啓上候 追日温暖之時節候被成 御揃御安全被
 成御暮目出度奉存候 然ハ当月十一日之御状 同廿三
 日ニ相達 忝致拜見候 正月十七日御出立ニて 長崎
 へ御旅行被成 四月朔日ニ御帰府之よし 初て致承知
 長之御道中御障も無之 重畳目出度奉存候 右ニ付
 当年は当地に御出府御座被成よし御尤ニ奉存候 且又
 春中以書状御問合せニ及候類句之事 古今類句ニ哉と
 御たつね之趣承知 御申越しの如く古今類句ニ御座候

直段之義金壺両が内ニてほしく候趣 御頼得御意候処
 手帛を見たかへ被成候哉 壺両迄ト御申越被成候 壺
 両ニてハ当地ニも本可有之候間 御無用ニ被成可申候
 壺両が内ニ候ハ、 いつ也共御つミ合せの節奉願候
 外ニ素本源氏物語 下直之品御座候ハ、一処ニ奉願候
 是ハ娘に遣し候本ニ御座候 湖月抄ニ候ハ、 弥よろ
 しく候へ共 直段はり候間 素本ニて式分位之処ほし
 く御座候 古今類句 素本源氏両様ニて 金壺両式分
 位迄ニ候ハ、 被遣可被下候 それが高直ニ候ハ、
 御無用ニ被成可被下候 決して急キ不申候 当年ニて
 も来春迄ニても 下直之本御手ニ入候節奉願候 直段
 之処間違不申様御聞置可被下候

俠客傳さし画 追々彫刻出来の様子ニ御座候 二編め
 の事御催促之趣致承知候 少しも如才無之候へ共 当
 二月上旬が両人の孫引きつき瘡瘡いたし 無難ニハ
 候へ共 久々かゝり ひま入多く候上 老妻二月中旬
 が病氣ニて 今以勝れ不申候 忝ハ本生病身ニて 且
 無人家内用多く まことに筆とり候いとま無之 三春

をむなしく送り候内 又合巻さうしの時節ニ成り 諸
板元(虫損)のさいそくを請候^四 当年ハ合巻の作をへらし 三
通り斗ニいたし候つもりニハ候へ共 是も多分潤筆請

取置候事故 つゝり遣し申さねハならず 是彼と手ま
はりかね候 乍併俠客傳二編も 合巻の作少しも片付
次第 又ミ早ミ取かゝり可申候間 左様御承知可被成
候 まつゝ初編うり出し 世上の評判も承り候へハ
弥はけミニ成り候間 初編彫刻無滯出来候様祈り申候
前文之趣御承知可被下候 七月中ニハ尚又あと写本差
登せ候様に可相成候 大暑ニ赴候得ハ 著述も成りか
ね候へとも 由断なく出精可致候 右御返事迄如此御
座候 已上

四月廿六日

篁 民

河内屋

茂兵衛様

〔料紙。黄色巻紙、茶・黄松葉模様散刷〕

五 〔天保二年〕七月四日

六月下旬御状相届致拜見候 弥御安全奉賀候 然ハ俠
客傳看板校合すり本一枚被遣之 御帛面之趣 致承知
候^二 あのまゝにてよろしく御座候間 御すり込せ可被
成候

一序文の内少し直し度所御座候

両雄トアル処 くら木ニいたし置候様 板木師へ御
申遣し置可被下候 委曲彫刻出来揃校合之節 直し可
申候 当年稀ナル大暑ニて凌かね 片息ニて避暑やう
く日をくらし申候 依之秋後すゝ風立不申候てハ
著述ハさら也 校合も出来かね候 久く休筆にて不
都合御座候 折角秋暑御いとひ可被成候 早ミ已上

七月四日

著作堂

幸便

河茂様

〔料紙。薄黄色巻紙〕

五 〔天保二年〕七月四日

三一